一宮市博物館だより

No.45 2009.10

もくじ

展覧会のご案内
特別展「牧進展−四季生生−」 2
企画展「くらしの道具−今と昔−」 4
樫の木文化資料館 4
博物館アルバム（平成21年度前半） 5
歴史探訪 6
新指定文化財 7
平成21年度催し物のご案内 8

牧　進　家郷（2004年 個人蔵）

特別展○日本の美

牧進展（まきすすむ）

―四季生生―

牧進（まきすすむ）氏は、川端龍子（かわばたりゅうし）氏に十五歳より内弟子として師事し、その薫陶を受け日本画家の道を歩み始めました。一九六六年、師である龍子氏の死去による青龍社（展）解散後は、無所属の画家として制作活動を続けることとなりました。龍子との出会いから別れまでの十四年間をそのすべての技術習得にかけたのでした。そして、現在に至るまで第一線で活躍を続けています。

その高い技術と美意識は作家川端康成氏の目にとまり、その感動を「牧進讃」として記されることにもなりました。川端康成氏は、自然の中の目に触れ、心に感じたことを絵にすることで、日本の四季が素晴らしいテーマになる、自然は尽きぬテーマを与えてくれるということを改めて牧氏に示唆したのです。

作品は、日本の四季の変化のなかで、花鳥風月や山川草木の本質を見出しつつ、あくまでも写生を基本に据えたものです。春夏秋冬のそれぞれに見られる事象を写し取り、牧氏の持つ鋭い感性によって仕上げられ、作品とされています。二〇〇三年の作品「静思」は、竹林で朝日を受けることでうまれる影の美しさをあらわしています（図1）。また、「夏目爽涼」のように山川草木の持つ美しさを紋様化することで表象しようとした作品もあります（図2）。半世紀にわたり日本の四季の美に身を置き、「美しい日本」、「日本の美」を写し出してきたのです。

平成十九年春、市内の妙興報恩禅寺に「四季生生図」と題された八枚の襖絵が奉納されました（図3）。八枚の襖絵が表す日本の四季。華やかであり、しかし、この作品の持つ独特の品格が高い精神性をも表現しています。

今回の展覧会は、牧進氏のもっとも初期の作品から現在までの作品まで四十六点と素描画十八点から構成されています。牧氏の五十年余りの画業を回顧する展覧会でもあります。二人の川端が愛した作家の描く日本の美の魅力をぜひご覧ください。

（伊藤和彦）

（図3）四季生生図（2006年 妙興報恩禅寺蔵）

●開催期間／
平成21年10月10日（土）～11月29日（日）

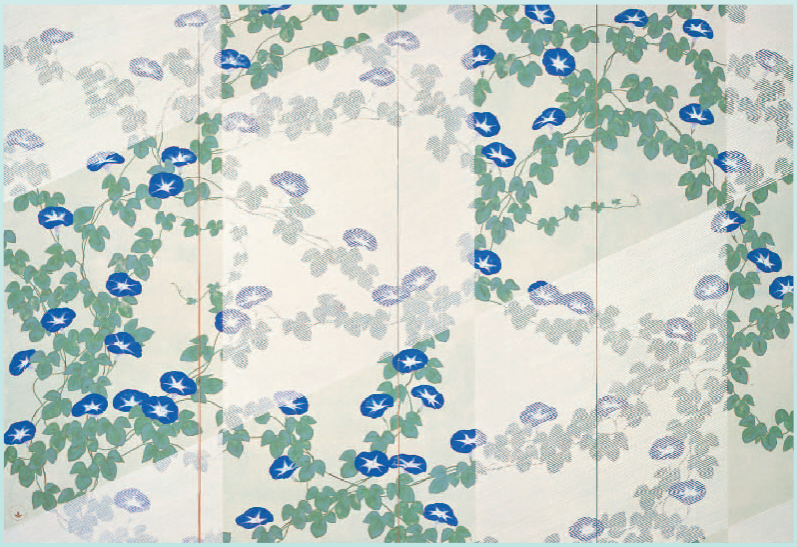
【休館日】10月13日（火）・19日（月）、26日（月）・
11月2日（月）・4日（水）・9日（月）・16日（月）・24日（火）
【観覧料】一般500円（400円）、高・大学生300円（240円）、小・中学生200円（160円）
※（　）内は20名以上の団体料金

美術講演会「牧進の芸術」

●日時／10月25日（日）　午後2時～　●会場／妙興寺公民館
●講師／草薙奈津子氏（平塚市美術館館長・美術評論家）
●定員／先着100名（無料、展覧会は観覧料が必要）

ギャラリートーク（学芸員による展示解説）

●日時／10月18日（日）、11月15日（日）　午後2時～



（図2）「夏日爽涼」（1981年 外務省蔵）

（図1）「静思」（2003年　館蔵）

企画展

くらしの道具 ―今と昔―

平成22年1月9日（土）～2月28日（日）

平成三年度から始まった企画展「くらしの道具～今と昔～」は、今年で十八回目となります。当初三年生対象で始まった展覧会も、平成十五年度からは四年生対象に変わり、内容には「今と昔」という時間軸に、「海と山と平野」という空間軸を付け加え、他にはない方向性を持つくらし展を開催してきました。

当初、四年生には難しいと言われていたテーマですが、毎年展覧会後に各小学校にお願いして実施する子どもたちへのアンケート（注）では、左図のようなうれしい結果が出ています。

日間賀島のみなさんに来ていただく「海のくらしを体験！」、木曽町黒川や木祖村から来ていただいてお話を聞く「山のくらしを体験！」などの催事にも、多くの子どもたちに参加してもらうことができました。そして、今年度はこのテーマで開催する最後の年になります。

来年度からは、「今と昔」にさらに新しいテーマを付け加え企画する予定です。

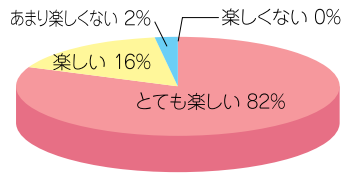
●展覧会中の催事

一月十七日（日）　海のくらしを体験！
一月三十一日（日）　山のくらしを体験！
二月十四日（日）　平野のくらしを体験！
○各回とも午前十時～十二時、午後一時～三時

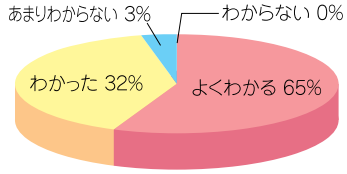
注　アンケートの実施・集計は、四年生社会科博物館見学準備委員会の小学校の先生方が実施・集計したものです。

（久保禎子）

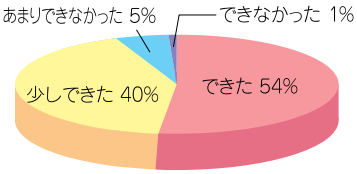
平成20年度 博物館見学児童アンケート結果



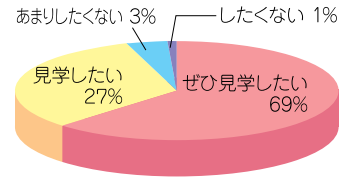
質問1. 見学は楽しかった



質問2. 見学はよくわかった



質問3. 自分から調べられた



質問4. また見学したい

樫の木文化資料館

市内萩原町高松に、詩人佐藤一英が収集した民具を展示している樫の木文化資料館があります。

佐藤一英は、萩原町高松出身の詩人で、版画家・棟方志功を世に出した有名な作品である「大和し美し」は、一英の長篇詩「大和し美し」を版画巻としたものでした。志功はこの作品を柳宗悦に認められたのを機に、世界的版画家になったのです。

佐藤一英は終戦後の昭和二十一年、「人間の根源、詩とは何か」を求め、中央詩壇を離れ、ふるさと一宮に帰りました。そして、真っ先に戦禍を免れた地蔵寺のイチイガシの前に立ち、「焼け伏した家屋の中からぬっと聳え立つこの老木は、傷心の私の目には偉大な聖姿と感じられたのである。」とても感動し、「樫の木のあるところ文化の発祥地」という樫の木文化論を生み出しました。そして、樫の木でできた民具を集め、その収集資料を展示しているのが樫の木文化資料館です。

今年は一英生誕百十年、没後三十年を記念し、十一月三日に催事が行われます。そのため、萩原中学校のみなさんにお願いし、新しい説明を木板に墨で書いてもらいました。

（久保禎子）

企画展
お釈迦さまのものがたり
～涅槃図から読本・草双紙まで～
▼4月25日～5月31日

涅槃図（ねはんず）とは、仏教の開祖であるお釈迦さまが涅槃に入られる情景を描いた絵画です。春の企画展では、市指定文化財の涅槃図三点を中心に、お釈迦さまが生まれてから亡くなるまでの物語を描いた絵画や江戸時代の版本を展示しました。現在では、お寺で用いられる仏教絵画と庶民の読み物だった絵入り版本は別のものと考えられがちですが、本展では近代以前の人々と同じ視点でその世界観に迫りました。

●会期中の催し

【講演会】
「日本文化における涅槃図・仏伝図の意義」
●講師／渡邉里志氏（東海学園大学教授）
●日時／五月十日（日）

涅槃図は、二月十五日のお釈迦さまの命日に行われる涅槃会（ねはんえ）の本尊です。奈良や京都の寺院で今も営まれている涅槃会の様子を写真で紹介しながら、涅槃会では涅槃図だけでなくお釈迦さまの生涯を描いた仏伝図（ぶつでんず）も用いられていた可能性をお話いただきました。

企画展
茶の湯の浸透-茶進上仕りたく-
▼6月20日～7月26日

江戸時代後期、尾張では茶の湯が流行しました。本展覧会では、名古屋城下町に住む武士や町人ばかりでなく、村に住む農民にまで浸透した茶の湯について紹介しました。

また、碾茶の一大生産地であった宇治での茶生産や尾張藩の御茶御用を勤めた宇治茶師についても、同時に紹介しました。

（写真左上）
宇治市歴史資料館長　坂本博司氏による講演会
（写真左下）学芸員による展示解説
（写真下）イベント「茶菓子をつくる」

新指定文化財の展示
▼8月1日～8月26日

平成二十一年六月二十四日に開催された教育委員会で、八王子遺跡出土の銅鐸（一点）と、法圓寺中世墓遺跡出土遺物一括（八十組百三十四点）が新たに一宮市指定文化財となりました。

そこで、八月一日（土）から二十六日（水）まで、発掘調査で出土した銅鐸としては愛知県内で二例目となる八王子銅鐸と、平野部の中世の墓地遺跡としては希少な例である法圓寺中世墓遺跡から出土した瀬戸窯、常滑窯産の蔵骨器や石塔を展示しました。

一宮市子ども写生大会作品展
▼8月8日～8月19日

一宮市内の幼稚園・保育園、小学校、中学校の入賞作品と代表作品を展示しました。毎年開催され、今回も多くの子ども達の感性あふれる作品が展示され、訪れた人々の目を楽しませてくれました。なお、三岸節子記念美術館でも八月二十一日から八月三十日まで開催されました。

2009 一宮美術作家協会展
▼8月29日～9月13日

一宮美術作家協会に所属する作家による最近作の作品を展示しました。絵画・平面、彫塑・立体、デザイン、工芸と多彩な作家の個性豊かなそれぞれの作風を楽しむことができました。

一宮写真協会選抜写真展
▼9月17日～9月27日

一宮写真協会より選抜された出品者による写真展。今回は「出会い　私の想いを　伝えたい。」をテーマとし、感性に裏打ちされた表現力で熱い思いを込めた作品を展示しました。モノクロ、カラーともに印象深く力作ぞろいでした。

歴史探訪

時之島村と大野家文書

◆時之島村の概要

一宮市西部に位置する一宮市時之島は、江戸時代、時之島村と呼ばれた。「尾張徇行記」によれば、時之島村は、概高五九四石余の村、その内の五一四石余が十三人の給地であり、他が蔵入地という村であった。また、「畠毛多クシテ皆砂地」という土地柄で、田畑七五町六反六畝歩の内、約九八%の七三町八反四畝三歩が、畑地であった。

村内は本郷、東島、西島、河原屋敷、山新田の五区に別れ、戸数一六一軒で、六六一人が居住していたという。また、後述する大野家文書中の寛政五年（一七九三）に書かれた村絵図によれば、戸数一六一軒、人数六六七人の内、男三二七人、女三四八人（原文のまま）とある。

さらに「尾張徇行記」では、戸数が多かったため、耕田が不足して「大赤見村ノ田畝ヲ専ラ承佃シ、又丹羽村浅井村定水寺村西大海道村ヲモ承佃」していたという。

畑地が多かったこともあり、「茶桑ヲ多ク栽又荏大豆ヲモ多ク作」り、茶は、「稲葉宿アタリヘ多ク売」り出していた。養蚕も行い、「繭ヲ岐阜関アタリヘウリ出」したり、竹の性質がよかったため、「東野村竹細工人ヘウリツカハ」したりもしていたという。

一方、村内には寺院が一ヶ所、社が四ヶ所あり、戦国・安土桃山時代に斎藤氏、織田氏、豊臣氏に仕えた日根野法印が居城した城の跡も一ヶ所あった。

◆大野家文書

大野家文書は、時之島村に在住した大野勘三郎家に伝わった史料群である。同家は、その先祖を先出の日根野法印であるといい、給人の組庄屋のほか、時之島村の惣庄屋や留木裁許人を勤め、名字・帯刀などの特権も許されていた。

周知の如く、本史料群の一部はすでに、『新編一宮市史資料編補遺二』（以下『市史補遺二』と記す）で紹介されているが、博物館では昨年五月、点数二五〇〇点強の本史料群をご寄贈いただいた。

本史料群は、若干の近代史料のほか、その大半を近世後期の史料で占める。その内容は、大野家の経営や村政、勤功関係などのほか、岡本、瀬戸、野呂瀬、長野ら複数給人との財政関係などに関する史料である。

◆給人との関係

大野家文書の中に複数給人との財政関係に関する史料があることを先に述べた。その中に文政七年（一八二四）十二月、大野家が、長野家給地百姓から蔵入百姓に支配関係がかわった事をしめす証文がある。そこには、大野家から「為礼金五拾両差出并是迄之先納金五拾七両余不及返済旨証文」を長野家が請取った旨が記されている。つまり大野家は地頭長野家に対し、礼金として合計一〇七両余を差し出したという訳である。

給地百姓から蔵入百姓にかわる際、旧地頭へ礼金が支払われる事は、『市史補遺二』で紹介されている野呂家給地百姓であった柳左衛門が、礼金十八両を差し出したという例でも見ることができる。しかし大野家の場合は、その金額が一〇七両余である。すごい金額である。

何があったのか。その事情を垣間見られる史料が、同じく『市史補遺二』で翻刻されている。

この史料は、端裏に「長野屋敷　心得方」とあるもので、嘉永元年（一八四八）に大野勘三郎永充が、三人の子供に書き残したものである。

これによれば、長野家（はじめ大島家）は、永充の祖父代の段階から大野家に先納金を調達させ、その返済が未だ行われていないにもかかわらず、文政七年、さらに百両の請求のあったことを記す。

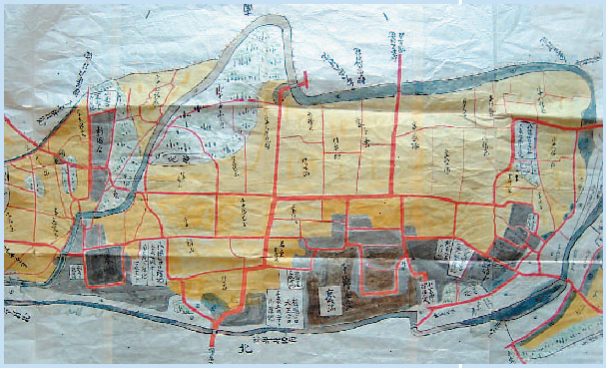
しかし、大野家では、この求めに応じない旨を長野家に伝えたところ、時の当主長野新左衛門がこれに立腹し、あろうことか抜刀して永充を追い打ちしたという。幸い永充は、あやうきところを逃げ延びたが、その後も長野家からの強い催促を受け、「新金五拾両御新金ニ差上其上私先納金并祖父代々先納金凡千両余御返済不及旨書付差上御屋敷様百姓相離レ」た、という。

先の証文と返済されていない先納金の金額に大きな差違があるものの、ここで見るかぎり、大野家の蔵入百姓への移行は、長野家のたび重なる先納金要求だけでなく、身の危険を強く感じたことなどがその背景にあったと考えられる。そのため永充は、大金を差し出してまで、長野家給地百姓を離れたのであろうか。

この他にも、大野家文書には複数の給人と給地百姓との関係、特に財政関係を見ていく上で貴重な史料が多く含まれている。

（坪内淳仁）

天保12年時之嶋村絵図



〈参考文献〉
『愛知県史資料編16　近世2尾西・尾北』
「尾張徇行記」（『名古屋叢書続編』所収）
『新編一宮市史資料編補遺二』

《付記》
このたび、大変貴重な史料をご寄贈いただきました大野家ご遺族の方に、ここに改めてお礼申上げます。

新たに一宮市指定となった文化財

平成21年6月24日に開催された教育委員会で、2件の文化財が新たに一宮市指定文化財となりました。いずれも有形文化財（考古資料）での指定で、一宮市博物館所蔵資料です。

八王子遺跡出土銅鐸（はちおうじいせきしゅつどどうたく）
法圓寺中世墓遺跡出土遺物一括（ほうえんじちゅうせいぼいせきしゅつどいぶついっかつ）

○八王子遺跡出土銅鐸……1点

大和町苅安賀の八王子遺跡は、弥生時代前期から古墳時代、古代、そして中世と継続して人々が生活していた複合遺跡です。一九九五年からの東海北陸自動車道建設に伴う事前の発掘調査で多くの成果が得られていますが、この銅鐸もそのひとつとなります。

八王子銅鐸は、高さ二十一・六ｃｍの外縁付鈕（がいえんつきちゅう）二式の流水紋（りゅうすいもん）銅鐸で、県内最古の事例であるとともに、発掘調査で出土した銅鐸としても清須市朝日遺跡出土銅鐸についで県内二例目となるものです。

製作は、弥生時代中期前葉（紀元前二世紀ごろ）と推定され、全体的に表面の摩滅が多く、長期間使用されたものと考えられています。特に、鈕（ちゅう）の部分のヒモ擦れの痕跡、内面突帯（ないめんとったい）の摩滅や、石製舌（ぜつ）が近くで検出されていることから、吊下げて音を鳴らす機能、つまり「聞く銅鐸」としての機能を持っていたことが知られます。弥生時代中期末（紀元前一世紀）以前には、倒立された状態で、小さな土坑に埋納され、埋没したことが確認されています。

○法圓寺中世墓遺跡出土遺物一括……80組134点

大和町馬引に所在する法圓寺中世墓は、十三世紀中葉以後十五世紀まで営まれた墓地遺跡であり、蔵骨器に火葬骨を納め、積石内に埋納し、墓標として石塔を建立するという、中世の葬送の一端を垣間見ることができる資料群です。

発掘調査は、一九八二年、九一年、九二年に実施され、出土遺物は、蔵骨器として利用された瀬戸、常滑、美濃須衛（みのすえ）の四耳壺（しじこ）・壺をはじめ、蓋として利用された鉢、山茶椀、供献用の小皿、土師器（はじき）の皿、そして、墓塔としての五輪塔（ごりんとう）、宝篋印塔（ほうきょういんとう）があり、そのうちの蔵骨器六十六組八十六点及び石塔十四組四十八点を指定したものです。

この中世墓は、尾張平野部の中世の墓地の様相、中世の葬制のあり方を示す貴重な遺跡であり出土遺物群と言うことができます。

なお、昭和六年にも遺物が出土しており、法圓寺所蔵の蔵骨器十点は、昭和三十六年三月二十七日付で一宮市指定文化財に指定されています。（土本典生）

法圓寺中世墓遺跡

蔵骨器（瀬戸・四耳壺）

蔵骨器（常滑・壺と鉢の組合せ）

宝篋印塔の組合せ

法圓寺中世墓遺跡検出時の様子

八王子遺跡

（写真左）八王子遺跡出土銅鐸B面
（写真中）八王子遺跡出土銅鐸A面
（写真下）八王子銅鐸の出土状況のレプリカ

平成21年度催し物のご案内

※詳細は市広報・ホームページ、または博物館までお問い合わせ下さい。

展覧会

特別展 牧進展
▼10月10日(土)～11月29日(日)

企画展 2009一宮市現代作家美術秀選展
▼12月5日(土)～20日(日)

企画展 くらしの道具～今と昔～
▼1月9日(土)～2月28日(日)

講座・公演

市民文化財めぐり
▼11月6日(金)

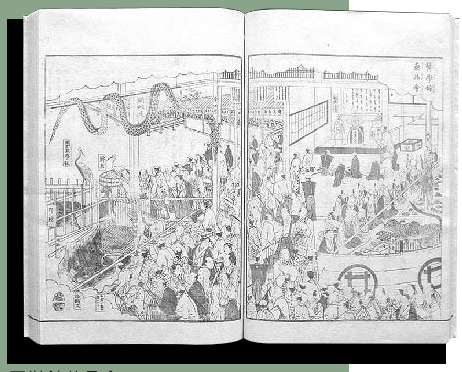
講座 尾張平野を語る14
▼2月28日(日)・3月7日(日)・3月14日(日)

公演 民俗芸能公演
▼3月21日(日) 13時30分より

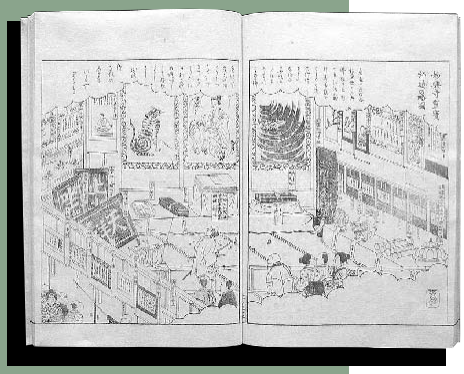
玉堂記念木曽川図書館

第9回 川合玉堂展―玉堂とゆかりの画人たち―
▼10月17日(土)～11月8日(日)

※会場は一宮市立玉堂記念木曽川図書館です。



医学館薬品会



妙興寺霊宝弘通の略図
※共に「尾張名図会」より

【博物館講座】

尾張平野を語る14

この講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野－特に尾張平野について考えてきました。

14回目となる今回は、尾張で展開された本草学や洋学、国学、絵画などの学問や文化をテーマに行います。

●日時・講師／

平成22年

2月28日(日)	豊田市美術館館長	吉田俊英氏
3月 7日(日)	愛知大学非常勤講師	遠藤正治氏
3月14日(日)	名古屋芸術大学教授	岸野俊彦氏

※各回とも午後1時30分～午後3時

●会　場／一宮市博物館講座室

●定　員／各回先着100名(当日整理券配布)

●聴講料／無料、ただし常設展観覧料が必要

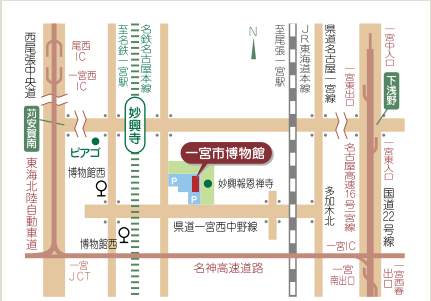
一宮市博物館だより
第45号

発行日／平成21年10月31日
編集・発行／一宮市博物館
印刷／光村印刷株式会社

利用案内

[休館日] 毎週月曜日、休日の翌日
[開館時間] 午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)
[観覧料] (常設展・聴講料含む)一般200円(160円)、高校・大学生100円(80円)、小・中学生50円(40円)
※( )内は20人以上の団体料金
※一宮市内小・中学生は無料
※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料
※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料

〒491-0922　愛知県一宮市大和町妙興寺2390
TEL0586-46-3215　FAX0586-46-3216
URL http://www.icm-jp.com/



[交通] 名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南出口より徒歩7分
ニコニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩5分